

英語中間構文の意味特性

— 「非明示的動作主」は何か —

初谷智子

1. はじめに

本稿では英語の中間構文 (middle construction) を取り上げ、この構文に関して広く主張されている「非明示的な動作主 (implicit agent) の存在」(Keyser & Roeper 1984) についての議論を行う。特に、この構文が、影山 (1996) で述べられている能格動詞構文の構造と類似した構造を持つことを主張し、その「非明示的動作主」が主語名詞句と同定される可能性について検証していく。その中で、中間構文の持つ特性がこの構文と能格構文との平行性を保証し、能格構文と同様にその構造が影山 (1996) の主張する「反使役化」によって動機づけられることを主張していきたい。

2. 中間構文の特性

中間構文は、(1) に見られるように、動詞が他動詞の能動形であるにもかかわらず、他動詞の意味上の目的語が主語として現れる構文であり、能動文と受動文の中間的性質を持つことから、中間構文と呼ばれる。商品の使用説明書や広告文などでしばしば見られる構文であり、近年盛んにその分析が行われている (松瀬・今泉 2001)。

- (1) a. Small cars sell well.
b. This door opens easily.
c. Bureaucrats bribe easily. (Keyser & Roeper 1984)

英語の中間構文については、一般に、(2) に挙げたようなさまざまな特徴が指摘されている。

- (2) a. 通例、他動詞が能動形で現れる。
b. 他動詞の意味上の目的語となる行為の対象が主語として現れる。
c. 他動詞の意味上の主語 (動作主) は表面に現れず、総称的に解釈された潜在的動作主 (implicit agent) がその意味に含まれている。
d. 基本的に単純現在時制をとる。

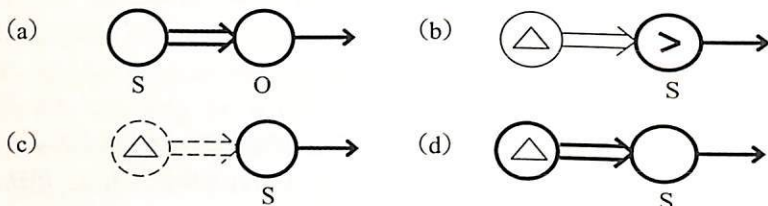
- e. 典型的には副詞句をとる。
- f. 特定の出来事ではなく、総称的な行為の可能性や主語の属性を描写する。

これらの特徴の中で、常に議論的となるのが (2c) の動作主の問題である。そこで、ここではまず、中間構文の非明示的動作主についてのこれまでの議論を概観し、その問題点について指摘していきたい。

3. 中間構文の非明示的動作主

Langacker (1991: 335) は (3) の 4 つの文について、下図のような意味構造を示している。

- (3) a. He opened the door. b. The door opened very easily.
 c. The door suddenly opened. d. The door was opened.



これらの図において、太線がプロファイルされた要素で、左の○が動作主、右の○が変化対象、太線の○は主語 (S) または目的語 (O) を表し、二重矢印は動作主から変化対象への働きかけを表している。また、△は特定されない動作主を表し、> は内在的特性としての、行為を促進する力を示している。

ここで (3b) が過去時制ではあるが中間構文を表しており、図に示されているように、動作主は意味スコープの中に入ってはいるものの、プロファイルはされていない。一方、(3d) は他動詞の受動文であり、動作主が主語ではないものの、プロファイルはされている。そのため、動作主がプロファイルされていない中間構文においては、受動文とは異なり、動作主を by 句で明示することができない。

- (4) a. This door was opened by John. (受動文)
 b. *This door opens easily by John. (中間構文) (松瀬・今泉 2001: 186)

しかし、Fellbaum (1985) は、中間構文の意味の解釈において次のようなパラ

英語中間構文の意味特性

フレーズが可能なことを示し、解釈上は“people in general”という動作主を読み取ることができるとしている。

- (5) a. This car handles easily.
- b. People, in general, can handle this car easily.
- c. This car can be handled easily by people, in general.

これは能格自動詞文が、主語がひとりでにそのような事態に陥ったという、ある種自発的な意味を表すのと対照的であるとされる。

- (6) a. This door opens easily. (= (1b)) (中間構文)
- b. This door opened suddenly. (能格動詞文)

また、中間構文では動作主を by 句で表示することはできないものの、for 句で表示することは可能なため、これも動作主が存在することの証拠であるとされる。

- (7) That book read quickly *for* Mary. (Stroik 1992: 131)

さらに、(8) のような with を伴う道具表現や、(9) のような動作主を伴う if 節と共起可能なことから、これらを中間構文に潜在的動作主が存在することの証拠であるとする研究者もいる (Greenspon 1996)。

- (8) a. The table polishes well with this cream.
- b. The meat cuts easily with a knife.
- (9) a. This flower should transplant easily if I do it carefully.
- b. The chest will unlock easily if you try to.

さらに、(2f) に挙げたように、中間構文は「総称的な行為の可能性 (generic doability)」 (Fellbaum 1985: 22) を表すとされるが、その総称性を保証しているのが“people in general”として解釈される潜在的動作主であるとする主張もある (Fagan 1992, 松瀬・今泉 2001)。

また、本多 (1997, 1999, 2002, 2005) は、生態心理学 (Gibson 1966, 1979; 佐々木 1994) の立場から、中間構文を探索活動とアフォーダンスに動機づけられた構文であるとし、中間構文は探索活動の結果生じるアフォーダンス知覚を表現したものであり、その探索活動を行う行為者である自己が「エコロジカル・セルフ」(環境を知覚することによって知覚される自己)として知覚されることにより、行為者が言語的には明示的に表現されなくなる、としている。

また、知覚者の位置である「観察点」が任意の知覚者に対して開かれていること（「観察点の公共性」）から、自身の知覚経験を他者との共有が可能な公共的なものと信じるにより、その知覚内容を、知覚者とは独立に存在する知覚対象の内在的属性であると信じるができるようになるとし、これにより、中間構文の知覚者について、話者または話者を含めた一般の人と解釈できるようになる、としている。

平井（2006）も本多と同様に、中間構文の潜在的動作主を概念化の主体たる conceptualizer 自身であると考え、それにより、行為対象の変化を、動作主の行為から切り離して単独でプロファイルすることができるようになるとしている。

この他にも、Hale and Keyser (1987), Ackema and Schoorlemmer (1994, 1995), Iwata (1999) など、潜在的動作主としての不特定な人々（もしくは主体化された概念化者）の存在が中間構文を特徴づける大きな要素であるとする研究は数多い。

しかし、一方で、動作主を一般の人々や概念化者と捉えることについては問題もある。まず、willingly, carefully, skillfully, angrily, happily, desperately, slowly といった行為者志向の様態副詞についてであるが、通常、これらの副詞は動作主の心的態度や動作様態を表すため、もし中間構文に潜在的動作主があるのなら、この構文と共に起できそうに思われる。しかし、実際には不適格となる (Fellbaum 1985)。

- (10) a. *The car drives willingly. (松瀬・今泉 2001: 191)
b. *These chairs fold up clumsily/competently. (Fellbaum 1985: 24)

(11)は適格な文であるが、この場合、willingly は潜在的動作主ではなく、主語名詞句である Sheila の態度について述べているという解釈しかない。

- (11) a. Sheila seduces easily and willingly. (Fellbaum 1985)

また、(7) に挙げた、動作主を for 句で表示できることが動作主が存在することの証拠になるという主張についてであるが、潜在的動作主が一般の人々や主体化された概念化者だとすると、たとえ for 句という形であっても別の動作主が明示された時点で、潜在的動作主解釈との衝突が起こることが予想される。しかし、そのようなことは起こらない。もし、動作主が明示された場合には潜在的動作主の解釈は自動的にキャンセルされる、というのであれば、その解釈はもともと随意的なものであると考えざるを得ない。

- (12) That book read quickly *for* Mary. (= (7)) (Stroik 1992: 131)

さらにもう一つの問題は、能格他動詞を用いた中間構文と能格自動詞文の曖昧性に関するものである。一般に、中間構文は一般の人々を潜在的動作主にとるのに対し、能格自動詞文は主語がひとりでにそのような事態に陥ったという、自発的な意味を表すとされる。しかし、影山（1996）では能格自動詞文について（13c, d）のような例が挙げられており、必ずしも完全に自律的でなければならないわけではない。

- (13) a. This door opens easily. (= (6a)) (中間構文)
 b. This door opened suddenly. (= (6b)) (能格動詞文)
 c. The door opened because of a high wind.
 d. The door opened at a touch. (影山 1996: 145)

むしろ能格自動詞文において大切なのは、その主語名詞句の自発性、自力性が何よりもプロファイルされている、ということなのである。ところが、そうなると、背景化されてさえいれば潜在的にほかの動作主が存在しても構わないということになり、潜在的動作主の存在によって特徴付けられるはずの中間構文の解釈との境界線が明確ではなくなってくる。

そこで、以下では、まず能格動詞構文の構造について影山（1996）の分析を概観し、その後、それが中間構文の構造とどのように関連付けられるかを見ていきたい。

4. 能格動詞構文の構造の分析

4.1 影山（1996）における能格動詞の分析：反使役化

影山（1996）は、自動詞・他動詞という観点から英語の動詞を、①他動詞しかないもの、②自動詞しかないもの、③自他両用の動詞、の3つのグループに大別した。そして、(14)のように同形態で他動詞と交替する③グループの自動詞を能格動詞、(15)のように対応する他動詞を欠く②グループの自動詞を非対格動詞と呼び、従来は単なる用語の違いとみなされていたこれら2種類の動詞群を区別し、異なる概念構造を想定する必要があることを論じた（影山 1996: 第4章）。

- (14) a. He opened the door.
 b. The door opened.
 (15) a. A traffic accident happened.

b. *The driver happened a traffic accident.

(16) a. Oswald assassinated Kennedy.

b. *Kennedy assassinated.

(影山 1996: 140)

この中で影山は、(14) のような自他同形の動詞について、従来支配的であった「自動詞を基本形とし、他動詞用法は自動詞に使役の概念を付加して派生する」という「自動詞の使役化分析」(Lakoff (1970), Guerssel et al. (1985), Pinker (1989), 丸田 (1998) 等) に異を唱え、能格動詞と非対格動詞についてそれぞれ (17) のような語彙概念構造を想定した。

(17) a. *open*: [x CONTROL [y BECOME [y BE OPEN]]]

b. *happen*: [BECOME [x BE AT-z]]

(影山 1996: 143-144)

能格動詞と非対格動詞は共に統語的には「非対格」であるという共通性を持つが、意味構造には大きな相違がある。特に能格動詞については、基本を自動詞的な単なる状態変化の意味構造とするのではなく、(17a) のように、もともとの構造が使役構造 (すなわち他動詞) であって、そこから (18) のような「反使役化」によって自動詞用法が生じると述べている。

(18) 概念構造における反使役化

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

→ [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

(影山 1996: 145)

(18) の操作では、使役主 (x=y) が変化対象 (y) と同定され、意味的に束縛される。束縛を受けた使役主は変化対象と同一物であることが意味構造上で保証されるため、統語的には抑制されて統語構造には現れない。その結果、BE の主語である内項 (y) だけが項構造にリンクされ、外項の位置は空欄になるために、能格自動詞は内項のみを持つ「非対格自動詞」の項構造を持つことになる。この操作によって、能格動詞文では、あたかも「変化対象 (y) が自ら変化する」かのような意味が表されることになるわけである。

ただし、ここで言う内在的コントロールの出所としての「使役主」という役割には、例えば擬人化されたドアや自動ドアが自らの力で開くというような場合だけでなく、主語の本来の性質のために状態変化に対して主語自身が「責任」を持っている、というような事態も含まれている。したがって、(19) の例文の下線部に示したように、主語の本来の性質に働きかける外的な力が別に存在したとしても、それが主語の性質を促進ないしは補助するためのものと

認識されるのであれば、自動詞構文を用いることに問題はない。

- (19) a. The door opened from pressure.
 b. The door opened because of a high wind.
 c. The door opened at a touch. (ibid.)

このように、能格動詞の自動詞用法においては、ドア自体が対象物であると同時に使役主でもある、という事態が表されていることになる。

ここで確認しておくべき点は、能格動詞の反使役化の操作がいつでも自由に適用できるわけではない、ということである。反使役化を左右する意味的・認知的条件として、影山は、①動作主に重きを置く他動詞には反使役化が成立しないこと、また、②反使役化の成立のためには変化対象そのものが使役主として働く資格ないしは性質（すなわち、内在的コントロール）を持っていないこと、を挙げている。

- (20) a. The wound healed. — The doctor healed the wound.
 b. *The patient cured. — The doctor cured the patient.
 (Farsi 1974, 影山(1996: 158)より引用)
- (21) a. The storm broke the window. — The window broke.
 b. He broke his promise. — *His promise broke.
 (Levin & Rappaport Hovav 1995: 85)
- c. He is breaking the law. — *The law is breaking. (影山 1996: 160)

例えば上記①に関して言うと、(20a) では、動詞 *heal* が ‘hale’ (健康な) という形容詞に由来し、「健康になる、傷が癒える」ことを含意することや、「傷」というものは自ら治癒する力を内包している、という我々の認識に基づいているため、反使役化が可能となる。一方、(20b) の動詞 *cure* は ‘care’ ((人を) 気遣う) がもともとの意味であり、あくまで治療者の観点からの表現であることから、動作主を絶対的に要求し、そのため使役主と変化対象を同定する反使役化の操作は実行できない、と説明される。また②に関しては、(21a) と (21b, c) との間の容認性の違いを取り上げ、「窓」はそれ自体の物理的性質によって壊れうるが、「約束」や「法律」は自ら壊れる力を持たないと認識されるためであると説明している。

4.2 「脱使役化」の意味構造

一方、他動詞から自動詞への転換にはもう一つ、「脱使役化」というプロセ

スがあることが、同じく影山（1996）で示されている。これは日本語の「植える／植わる」などの自他交替に対応するものであるが、能格他動詞から能格自動詞を導く規則として Levin and Rappaport Hovav（1995）が提案した「反他動化」や、Langacker（1991）の想定する能格自動詞の意味構造はこれに対応するものと思われる。ただし、影山は英語の能格自動詞にはこれに属するものはないとしている。

脱使役化は「使役主を変化対象と別のものとして置いたまま、統語的には表出ししない」ことによって生じるものであり、それゆえ動作主の存在が前提となる。

(22) a. 公園には様々な種類の木が植わっていた。

b. 壁にはピカソの絵が掛かっていた。

(23) a. *Cherry trees planted in the park.

b. *The books packed in the box.

（影山 1996: 184）

(24) 概念構造における脱使役化

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

|

↓

φ

内項

（影山 1996: 188）

脱使役化においては、動詞は自動詞であっても、意味的には動作主が含意され、それは不特定多数の人間（φ）として解釈される。一般に中間構文の非明示的主語に関して主張されているのは、この脱使役化と同じプロセスであろう。すなわち、意味構造に存在する行為者を統語構造には表さないということであり、使役主が意味構造に隠れている、という考え方である。

では、中間構文の動作主は本当に「不特定多数の人々」や「主体化された概念化者」なのだろうか。影山によれば英語の能格動詞の成立プロセスには存在しないとされる脱使役化が、他動詞構文から中間構文を生成する際には存在するのだろうか。

そこで、5節では、中間構文と能格動詞構文とを比較しながら、中間構文を動機づけているものについて検証していく。

5. 中間構文についての検証

まず、能格動詞のような反使役化による自他交替と、中間構文との共通点について見ていく。

中間構文は、他動詞の能動形で受身的な意味を表すという点では、能格動詞

の自動詞文と並行的な関係にあると言える。

(25) a. This door opens easily.

b. This door opened finally.

(松瀬・今泉 2001: 185)

また、能格構文も中間構文と同様に、他動詞の受動文とは異なり、動作主を by 句で明示することができない。つまり、どちらの構文でも、動作主はプロファイルされていない。

(26) a. *This door opened by John.

b. *This door opens easily by John.

(松瀬・今泉 2001: 186)

さらに、中間構文に用いられる動詞の典型は状態変化を表す他動詞であり、すなわち、(18) ((27)として再掲)の能格動詞の概念構造と同じく、xによる行為という上位事象と、yの変化という下位事象の両方を含んでいる。上位事象だけでは中間構文にはなれないことは(28)-(31)の例から明らかである。また、下位事象だけだと動詞が自動詞になってしまう。

(27) 概念構造における反使役化 (= (18))

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

→ [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]] (影山 1996: 145)

(28) a. *The answer knows easily.

b. *Politicians don't believe easily.

(29) a. *That ceiling doesn't touch easily.

b. *This soccer ball kicks well.

(影山 1996: 276)

(30) a. *The counter wipes quickly.

b. The counter wipes clean quickly.

(31) a. *Elephants don't kick easily.

b. Elephants don't kick senseless easily.

(Carrier & Randall 1993, Rapoport 1993, 影山 (1996: 277) より引用)

このように、中間構文が可能となるのは、能格動詞と同じく、上位事象としての x による行為と、下位事象としての y の変化の両方が含まれている場合であるということがわかる。

4.1節で見た影山 (1996) における能格動詞の自動詞用法の認可条件に立ち戻ってみると、その成立条件は以下の2点であった。

(32) 能格動詞の自動詞用法の成立条件

- a. 概念構造における使役主 (x) と変化対象 (y) が同定されること。
(独立した動作主が絶対的に必要となるような意味構造においては自動詞用法が認められない。)
- b. 変化対象 (y) が内在的コントロールの性質を備えていること。

ここで今度は、中間構文の主語名詞句について、その性質を考えてみる。中間構文の主語名詞句については、一般に、「動詞の表す動作の遂行のために、何らかの責任を負うような性質を持つ対象物のみが中間構文の主語になりうる」とされる (Lakoff (1977), van Oosten (1977), Fagan (1992) 等)。例えば (25a) *This door opens easily.* について言うなら、そのドアに「誰がやっても簡単に開けることができる」という属性があり、「簡単に開けることができる」ということに対して責任を負うのはドアの持つ属性だけ、ということが成立する場合に、中間構文が可能になる、ということである。そうすると、この時、たとえ物理的にドアを開ける人間が別に必要であったとしても、その人が持つ能力や特性が一切考慮されず、プロフィールもされないわけであるから、「ドアが簡単に開く」という下位事象をコントロールしているのはドアの属性のみということになり、能格構文と同様に、これを使役主 x として同定することが可能になるのではないかと考えられる。つまり、主語名詞句の属性としてプロフィールされている要素こそが動詞の表す動作の責任を負っている、という形をとることにより、中間構文においても、能格構文同様、反使役化が可能になると考えられるのである。

実際、能格動詞構文においても、前述した (19) の例のように、主語名詞句の持つ本来的な性質が状態変化に対して負う「責任」というものが、コントロール力として読み込まれる場合もあることから、中間構文のケースでも、やや弱い形であるとはいえ、主語名詞句の持つ「責任性」を内在的コントロールの力として解釈することに問題はないと思われる。

一方、中間構文の成立に反使役化が関わっているとすると、(32a) から明らかのように、変化対象の力だけでは発生しないような出来事、すなわち、どうしても外的な動作主が必要な出来事については、このプロセスは適用できないということが予想される。例えば、*make*, *build*, *write* といった作成を表す動詞や、*murder* のような殺人を表す動詞などは、対象物の自発性だけでは事態が発生しえないため反使役化による自動詞化ができない動詞群であるが、これらの動詞は (33) のように中間構文にも適用できない。

英語中間構文の意味特性

- (33) a. *This kind of error makes easily. (影山 1996: 277)
b. *This kind of poem writes easily. (Fellbaum and Zribi-Hertz 1989: 11)
c. *This type of bridge builds easily. (ibid.)
d. *Wool sweaters knit easily. (Fellbaum 1986: 17)

このことも、中間構文の形成に反使役化が関わっている一つの証左と考えられる。

このように、中間構文において描写されている主語名詞句の属性を、内在的コントロールの源と捉えることで、中間構文における反使役化のプロセスが可能になり、能格動詞の場合と同様に、他動詞の述語動詞を受動態にすることなく、内項を主語にすることができるのだと考えられる。

そこで、最後に、この反使役化のプロセスを想定することにより、3節で見た潜在的動作主の存在についての様々な議論をどのように説明できるか見ていきたい。

まず、(7) の、動作主が for 句で表されうるという点についてであるが、for 句というのはもともと知覚者・経験者を明示するための形式であることから、中間構文において、主語名詞句の持つ属性によって可能となる行為を経験する主体が、属性とは別に存在したところで、何の問題もないと言える。

また(8)の with を伴う道具表現や(9)の動作主を伴う if 節との共起についても、これらはいくまで主語名詞句の属性が可能とする行為が成立するための付帯条件・環境設定の提示に過ぎず、これがそのまま中間構文の解釈に別の動作主の存在を要求する要素であるとは解釈しにくい。

また、中間構文の総称性についてであるが、これは決して潜在的動作主の不特定性からくるものではなく、動詞の現在時制や副詞の時間的・空間的不特定性などの力により、主語名詞句の属性によって可能となる行為の恒常性を担保するという、この構文の機能がそのまま反映されたものと言える。したがって、潜在的動作主の不特定性や主体化された概念化者という解釈についても、中間構文の意味構造に組み込まれたものではなく、あくまでその現在時制という形式や属性記述という機能から語用論的に派生するものとして理解すべきであろう。

なお、能格動詞と中間構文の違いとして、Keyser & Roeper (1984) は、能格動詞では無生物を主語とする場合でも命令文が成立するのに対し、中間構文では成立しないとして次の例を挙げている。

- (34) a. Sink, boat!

b. Close, door!

(35) a. *Kill, chicken!

b. *Translate, Greek!.

(Keyser & Roeper 1984: 384)

これに関しても、中間構文の持つ総称的な意味合いが関わっていると考えられる。能格動詞文は、実際の出来事の発生を述べる文であり、したがって時制や相、時間や場所を特定する副詞の付与なども自由である。それゆえ、これからある事態が発生するよう命令することも祈ることもできる。一方、中間構文で述べられているのは、主語名詞句が備えている特性であり、この構文は「対象物の特性を描写する」という機能を持つ。つまり、現実世界におけるその事態の発生という観念からは離れて、その事態が誰がやっても起こり得るものである、というある種の仮想的な恒常性を記述しているものであって、それは命令する内容としてはそぐわないものになるのである。

6. おわりに

以上、本論では英語の中間構文を取り上げ、この構文に関して広く主張されている「非明示的な動作主」について、一般に主張されているような「不特定多数の人々」や「主体化された概念化者」ではなく、能格動詞構文と同様に、「主語名詞句の属性（によるコントロール）」として解釈すべきことを示した。その中で、中間構文の持つさまざまな特性がこの構文と能格構文との平行性を保証し、能格構文と同様に、その成立が影山（1996）の主張する「反使役化」によって動機づけられていることを示した。

中間構文については、今回取り上げた典型的なもの以外にも、道具や場所を表す名詞句が主語になる疑似中間構文や再帰中間構文と呼ばれるものがある。これらについては今回検討した能格動詞の構造は当てはまらず、同じ中間構文という名前がついていても、かなり異なる構造を持つものと思われる。これらの構文について、どのような仕組みでその構造が認可されているのか、稿を改めてさらに分析していきたい。

References

- Ackema, Peter and Maaike Schoorlemmer (1994) The middle construction and syntax-semantics interface. *Lingua* 93: 59-90.
- Ackema, Peter and Maaike Schoorlemmer (1995) Middles and nonmovement. *Linguistic Inquiry* 26: 173-197.

英語中間構文の意味特性

- Fagan, Sarah (1988) The English middle. *Linguistic Inquiry* 19: 181-203.
- Fagan, Sarah (1992) *The syntax and semantics of middle constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fellbaum, Christiane (1985) Adverbs in agentless actives and passives. *CLS* 21: 21-31.
- Fellbaum, Christiane (1986) *On the middle construction in English*. Indiana University Linguistics Club.
- Fellbaum, Christiane and Anne Zribi-Hertz (1989) *The middle construction in French and English: A comparative study of its syntax and semantics*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Gibson, James J. (1966) *The senses considered as perceptual systems*. Boston: Houghton Mifflin.
- Gibson, James J. (1979) *The ecological approach to visual perception*. Boston: Houghton Mifflin.
- Greenspon, Michael (1996) *A closer look at the middle construction*. Ph.D. dissertation, Yale University.
- Guerssel, Mohamed, Ken Hale, Mary Laughren, Beth Levin and Josie W. Eagle (1985) A cross-linguistic study of transitivity alternations. *Papers from the parasession on causatives and agentivity, CLS 21, Part 2*: 48-63.
- Hale, Ken and Samuel J. Keyser (1987) A view from the middle. *Lexicon Project Working Papers* 10: 1-64. Center for Cognitive Science, MIT.
- 初谷智子 (2004) 「ECM 構文における受動化：主体化の観点から」 *JELS* 17, 日本英語学会, 47-56.
- 初谷智子 (2005) 「対格付き to 不定詞構文の受動化とモダリティ」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第18号, 姫路獨協大学外国語学部, 139-154.
- 平井剛 (2006) 「英語中間構文の意味構造」山梨正明他 (編)『認知言語学論考』No.5, ひつじ書房, 79-118
- 本多啓 (1997) 「英語の主体移動表現, 中間構文, 知覚動詞について: 生態心理学の観点から」『駿河台大学論叢』15: 95-116.
- 本多啓 (1999) 「再び英語の中間構文について」『駿河台大学論叢』18: 137-156.
- 本多啓 (2002) 「英語中間構文とその周辺: 生態心理学の観点から」西村義樹 (編)『認知言語学 I : 事象構造』東京大学出版会, 11-36.
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論: 生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会.

- Iwata, Seizi (1999) On the status of an implicit argument in middles. *Journal of Linguistics* 35: 527-553.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論：言語と認知の接点』, くろしお出版.
- 影山太郎 (2001) 「自動詞と他動詞の交替」影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店, 12-39.
- Keyser, Samuel and Thomas Roeper (1984) On the middle and ergative constructions in English. *Linguistic Inquiry* 15: 381-416.
- Lakoff, George (1970) *Irregularity in syntax*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Lakoff, George (1977) Linguistic Gestalts. *Papers from the Thirteenth Regional Meeting*. eds. Woodford A. Beach, Samuel E. Fox and Shulamith Philosoph, 236-287. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Langacker, Ronald W. (1987, 1991) *Foundations of cognitive grammar*. Vols. I, II. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1990a) *Concept, image, and symbol: The cognitive basis of grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (1990b) Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1: 5-38.
- Langacker, Ronald W. (1995) Raising and transparency. *Language* 71: 1-62.
- Langacker, Ronald W. (1998) On subjectification and grammaticization. *Discourse and cognition: Bridging the gap*. ed. Jean-Pierre Koenig, 71-89. Stanford: CSLI Publications.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntactical semantics interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー』松柏社.
- 松瀬育子・今泉志奈 (2001) 「中間構文」影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店, 184-211.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and cognition: The acquisition of argument structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Sakamoto, Maki (2000) *A cognitive network of the middle and related constructions in English and German*. Doctoral dissertation. Tokyo: Department of Language and Information Sciences, University of Tokyo.
- 佐々木正人 (1994) 『アフォーダンス：新しい認知の理論』岩波書店.
- Stroik, Thomas (1992) Middles and movement. *Linguistic Inquiry* 23-1.
- Taniguchi, Kazumi (1994) A cognitive approach to the English middle

英語中間構文の意味特性

construction. *English Linguistics* 11: 173-196.

van Oosten, Jeanne (1977) Subjects and agenthood in English. *CLS* 13: 459-471.

van Oosten, Jeanne (1986) *The nature of subjects, topics and agents: A cognitive explanation*. Indiana University Linguistic Club.

An Analysis of the English Middle Construction: What is the Implicit Agent?

Tomoko HATSUTANI

The English middle construction like "Small cars sell well" has many distinctive characteristics: its predicate is normally an active transitive verb in the simple present tense; the subject NP corresponds to the theme of the transitive verb, but the verb isn't passivized; the agent of the transitive verb is always implicit and doesn't appear in the structure, while the interpretation of the agent as "people in general" is incorporated in the construction; it usually comes with an adverb or adverbial phrase; and it depicts "generic doability" (Fellbaum 1985) of the process described, or the notable feature of the subject NP. This article focuses on the interpretation of the implicit agent, which is one of the most debated issues concerning the middle construction. It rejects the widely-accepted idea that the implicit agent of this construction is "people in general" in favor of the suggestion that the implicit agent should be understood as the subject NP itself, because the intrinsic power derived from the subject NP's notable feature renders to the NP the ability to control the process described. This becomes possible through an "anti-causativization" process, which is observed in the transitive-intransitive alternation in ergative verbs. The middle construction has a very similar semantic structure to that of ergative intransitive verbs, thus it is argued that the middle construction could be achieved through this same process.